

# 集団が苦手な子どもが集団の中で自己効力感 (自信) をつけるために

—イメージが分かりやすい環境設定の効果—

○松尾真理  
(神石高原町立保育所)

佐々木美穂  
(神石高原町立保育所)

## 問題と目的

年少、年中児と集団での活動へ入りにくかった子どもが、年長児になっても、集団になかなかじめずに孤立していた。低年齢児では、ひとり遊びでも問題はなかった幼児が加齢とともに、他児とも関わりが持ちたくなり、その結果トラブルに繋がる事もある。このトラブルを引き起こす要因は、発達面の問題も考えられるが、それ以外でも様々な要因が考えられる。

幼少期の発達には、個人差が生じやすく、他児との遊びのイメージの共有が難しくトラブルが発生しやすい。そのため、一人一人の発達を見極めたうえで、保育を実践することが重要となる。そこで本研究では、集団が苦手な子どもが他児と遊びを円滑に行えるようイメージが分かりやすい環境構成のあり方の保育の検討を行った。

## 方法

**対象児**：公立保育所に通所する5歳児女児N児であった。

**実施時期**：2018年4月から9月の6ヶ月の中で、行動観察を断続的に実施した。

**調査方法**：対象児との関わりの中で、行動を観察し、保育終了後に対象児の行動を想起して記録した。行動観察は、同じクラスの幼児とのごっこ遊びの場面を中心に行った。

## 結果及び考察

### エピソード1 (2018.6月小麦粉粘土3回目)

年長児になり、2ヶ月が過ぎたが同じクラスの子と遊ばずいつも孤立して粘土を丸めて遊んでいる為、N児の粘土遊びを通して仲間づくりを試みる事にした。環境設定として子どもたちの粘土遊びのイメージ共有しやすいよう小麦粉に、香りと色を付けた。(白小麦粉、緑抹茶、茶色コーヒ-、黄色レモン、赤バニラエッセンス)子どもたちの反応「いいにおい」「ぱんのおいじゃ」「ケーキも出来る」と遊びが発展した。がN児は粘土には興味を持ち片付けの時間になっても夢中になって遊んでいた。

(考察)小麦粉粘土での遊びでは、N児は他児とイメージの共有が見られず、関わりがなかった。そこで、子どもたち中心でパン屋さんごっこができるように、絵本を見たり、パン屋さんを見学したりして、子どもたちのイメージの共有をこころみた。

### エピソード2(2018.7おみせやさんごっこ3回目)

「ここでパン作るところな」「わかった」「ここはレジ」「何する人になる？」と子ども同士でパン屋さんごっこを展開している。「Nちゃん何回言ったらわかるんそこは作るところじゃない」保育士がN児を連れてパンを作るところに行こうとすると、「オオカミブレットは、ここが作るところじゃった」と大声で叫んだ。

(考察)このことから、N児の中のパン屋さんのイメージは、視覚優先で、パン屋さんを再現する環境設定をすることによって、他児の集団の中へ入り、集団で遊ぶ自信に繋がると感じた。

### エピソード3 (2018.7後半パン屋さん再現)

保育士がパン屋さんを再現したところから遊び始めると、「すげーオオカミブレットじゃ」「おれ作る人」「私レジ」と遊び始めた時N児が、「Nちゃんレジしたい」とするとH児「私もレジしたいけーNちゃん一緒にしようや えーえ？」N児「えーよ」と保育士が何も言わなくても子どもたち同士遊びが展開した。

(考察)子どもたち全員でパン屋さん見学に行き、作るところやレジ等見せてもらった経験から、みんなイメージを共有し、パン屋さんを再現することにより、子ども同士で関わる事が出来た。

## まとめ

集団が苦手な子どもが集団の中で自信をつける為には、抽象概念的な(遊びの全体から切り離して一面的にとらえた概念での)環境設定ではなく、具体概念(全体をとらえた概念)的な環境設定(構成)を繰り返し経験することが、集団が苦手な子どもが集団の中で自己効力感(自信)をつける手掛かりになると考える。